

*She and me
loiol*

台所の机に頬杖をつき、私はスーヴが温まるのを待っている。

硝子戸の外で雨が降ってるからだろうか、ラジオから聴こえる音楽にノイズが混ざっている。80年代初頭のそのメロディーを初めて耳にしたのは物心がつかない頃のはずで、母がかけていたその曲を赤ん坊の私も一緒に聴いたのだと思う。だから、という訳ではないが、ただ懐かしいだけではなく母の存在を身近に感じる事ができる。

雨の音は二種類で、一つは戸に当たるとつ、とつとつ、という粒のもの。もう一つは、さあーっ、という絶え間無い全体を包み込むもの。

私の視線はどこを見ても見えていない。焦点を合わせず、ぼうつと机の上辺りに拡散している。ただし心は割合はつきりしている。現実的な生活を考える自分と、昔の事を考える自分がいる（本当はもう一人、このお気に入りサイズの小さなラジオの良さをちつとも理解しただけでなく、子供っぽいと揶揄して止まない同居人に対して苛立つ自分もいたが、先ほどお詫びにゼリーを買いに出かけた事もありこの気持ちは雨に溶けてなくなってしまった）。

現実的な事を思う私は、同居人との将来や両親との確執、また自身のキャリアや生活していく事への金銭的な問題点について思いを巡らせている。その後ろで昔の事を思う私は拗ねた様子顔で、私が本当に好きな事、続けていきたい事、大切にしていきたい事について、過去の思い出とそれらを一つひとつ繋ぎ合わせている。

前者の私は後者の私を疎ましく思っている。後者の私は前者の私を軽蔑している。双方の私達は相容れない。この社会に生きる私はどうしたって一人なのだから折り合いをつけなければならぬ。ただ水と油の様にそれは叶わない。そういうまだらな私全体を私は侮蔑する。前者の私が慰める。後者の私は悪びれない。最終的に、後者の私が全て悪い、みたいな空気になる。ただし前者の私はシステマチック過ぎるので何とも言えない。

呆けたままそういう葛藤を繰り返している、入り口は狭く中は広い形のへこみに溜まった水が押し出される予感がした（正しく言えば、ちょっと何かの圧力をかければそれが押し出されるであろう確かな予感がした）。

私は興味本位から押し出す力を込めてみると、果たしてそれは私の後ろ側へずるっと出てしまった。それを視覚的に捉えていないが出たのは分かった。それはシャボン液をつけた大きなわっかで、空中を捕まえようとするとその放物線の通りにシャボン玉が発生するような感覚だった。

とは言えそんなよく分からない感覚は、ぼやけた認識が生んだバグ、つまり幻の勘違いだと思っただけだが、実際に私の後ろでがちやりとドアを開く音がして私はようやく目を覚ました。

音のする方を見るとちようどドアが閉まる所だった。白黒しましたの靴下が見えた。私も今日は白黒しましたの靴下を履いている。頭の中は妙にすっきりしている。さっきまでの葛藤は無い。昔の思い出は駅前で配っているティッシュと同等の価値しかないように感ぜられた。

外に出てみると、見覚えは無いけれどどこか懐かしい後ろ姿が見えた。というより後者の私だとすぐに分かった。私はとっさに財布を持ってサンダルをつつけて彼女を追っかけた。雨は止んだみたいで、雲の切れ目からちらちらした日差しが降りてきている。

*

彼女は近くの駅の改札を抜けて向こう側のホームへ行っていた。彼女の見た目は私そっくりなのだがシャボン玉で出来ているので、表面には虹色の照りがある。本当は「こらー、待ちなさい！」と叫びたい人がいるので出来ない。ようやく向こう側のホームに着き、息を切らして辺りを見てもない。見るとシャボン玉の私はまた反対側のホームに戻っていて、あっかんべーをしている。そして改札を出て行ってしまった。私は駅員に「用事があつて改札を通つたが、別の急用が出来たので家に戻る必要がある」と言い訳して外に出た。シー（シャボン玉の私、の略）に対して腹が立ったので、とりあえず売店でハイチュウを買ってみつつ一気に口に入れてよく噛んだ。

*

私はシーを追って商店街に来た。おばさん達がうろろして歩いて走りにくいったらない。体をナメにして人を縫って進んでいると、親しげに私の名を呼ぶ声があつた気がした。気がしたというよりあつたはずだったが、あつた気がしたという認識にしておいて、もしかしたらないかもしれないから…という事で気にせず行こうとした。でももう一度呼ぶ声が出て止まって振り返ると、中学生の頃と同級生がいた。端的に言うともものすごく仲良かった訳ではないが、表面上は仲良しにしていた子だった。別にいじわるを言うつもりはなく、向こうもそうやって取り繕う子だった。手を降るその子の表情は「久しぶり！ 元気？ 最近何やってるの？」というモノだった。それは社交辞令に過ぎず、実際は別にそんな事を思っていないはずだった。だから私も同じ表情をして、腕時計を指差し（実際はしていないが）「急ぐからまたね！」と口パクして気にせずシーを追っかける事にした。

商店街は今日お祭りだったようで、段々と路面に屋台が並びだしていた。お面屋、金魚すくい、スーパールボールすくい、わたがし、イカ焼き、りんご飴…小学生の頃に遊んだ記憶が蘇り、ポツケの中で握った硬貨の感触がまざまざと思ひ出される。通りの行き止まりに大きなノラクロがいた。ビルの2階ほどの高さのノラクロには空気が注入されていて、中に入った子供達がぼよんぼ

よんとした内部で遊ぶ装置だ。その列にシーがいた。
つかつかと近づいた私はシーに「ね！　なんで逃げるの」と言いかけたが、すぐに後ろに並んでる子供達が「横入りしないでよー！」と、眉間にしわを寄せて私に言った。隣の保護者は怪訝な顔をしており、私は仕方がなくひっこんだ。シーは横目でこちらを見ながら舌をべーっと出している。まったく。

ノラクロの胴体には透明な窓がついていて中の様子が見れる。子供達が楽しげに跳ね回っている。声は聞こえないが、きゃあきゃあ言っている顔をしている。そこに背丈の大きなシーも混じっている。近くの軒先ではおじいさん達が将棋を打っていたり、ソース焼きそばを立ちながらほお張っている中学生男子や、所在無げに立ち尽くす父親と思われる男性などがいた。

*

私がソースせんべいを買っている間に、シーはすでに向こうの駅へ向かっていた。何十枚というソースせんべいを抱えつつ、一枚一枚ぱりぱり食べながら私は追って、ぎりぎり同じ電車に乗れた。彼女は隣の車両にいたのだけれど、そっちに移動する前に、まず手に思いっきり垂れたソースせんべいのミルクをどうにかしないとイケなかった。ミルクが指の隙間をじんわり伝って、ぼたぼた垂れて恥ずかしかった。どうにも仕方が無いので、手を隠す様に窓側を向いて外を眺めるしかなかった。シーはこちらを見て笑っている様だった。途中、電車は川を渡った。電車に沿って飛行する鳥の影が川面に映った。

ワリと大きめな駅に着いた後、シーは特急列車に乗ったのが見えたから私も追って乗った。ただこの席にいるのかは、見失ってしまっただけで分からなかった。

しばらくしてから缶コーヒーを買いに行った時、隣の車両で駅弁を食べているシーを見た。ようやく問詰めるチャンスだと思っただけ、彼女は窓側に座っているし、通路側のおじさんを介して彼女に話しかけるのは何かが引けた。だからとりあえずシーの所に行って手短に「どの駅で降りるの」と聞いてみると「0 海岸」と言った。それを聞いて私の心は踊った。なぜならその海は私が幼少の頃より夏の度に遊びに行った海で、高校生になってからは思い出した折に一度か二度行ったきりだったからだ。私も駅弁を買ってほくほくしながら列車に揺られた。コンクリートの景色は田園のそれへと変わり、後は林や森が続いた。現在の私からすれば2、3時間の列車の移動などという事はないけれど、子供の頃の私にとっては別世界への旅だった感覚が薄ぼんやりと思ひ出された。

*

ローカル線へ乗り換えるために、無人駅でシーと私は列車を降りた。ベンチから向こうにはまったりとした田舎の景色が広がっていた。快晴の下、山や林や畑がただひたすらにじっとしており、蝉時雨だけが見えない色合いを添えていた。その音と頬を伝う汗だけが唯一、動的な存在だった。

喉が渴いた私は紙パックのジュースを自動販売機で買った。シーはこちらをうなだれて見ている。私は硬貨を彼女に差し出すと彼女はりんごジュースを買った。そして二人でベンチに座っていた。

紙パックの表面についた水滴で手のひらが濡れる。ふと中学生の頃、休日の学校の体育館へ行

って遊んだ事を思い出した。裸足で触れる体育館の床、電気のついていない内部と開放された扉から入り込む光のコントラスト、コンビニで買ってきたご飯とジュース、広い体育館の真ん中で座って蝉時雨を聞いた日。あの子は結婚した、あの子は亡くなった、あの子は2年前に会ったきりだ、と考えた。過去はとくに乾いて朽ち果てていたのだと今更ながらに気づいた。ジュースを飲み終わったシーはストローの先を舌に吸い付けてぶらぶらさせている。ベンチの下には死んだ虫が固まってひっくり返っていた。

*

0 海岸駅に着くと、ぷんと潮の香りがした。子供の頃によく行ったお土産屋や小さなハンバーガー屋はまだあった。シーは道端に生えている長い草をぶちんと千切り、それをひゅんひゅん振り回しながら先を歩いていった。風が肌にべたつく。民宿街へまっすぐ行かず、駅のはずれから続く畑の一本道へシーはふらふらと行く。彼女は「どうせ私はついてくるに違いない」と思っていると思うとうんざりしたから、しばらくほっといてあえて私は駅前の喫茶店で休む事にした。

みしみしと音を立てる床の古ぼけた店内は涼しげだった。天井につけられた大きな羽が、からっからっからっからっ、と回っていて電気はついていなかった。昔からいる骨董品みたいなおばあさんが、ゆっくりと冷えたアイスコーヒーを持ってきてくれた。窓から見えるシーは時折こつちを振り返っていたが、私は無視をきめこんだ。ノスタルジックな気分になった私はおばあさんに「最近、人は来ますか」とか「前からこちらにいらっしやいましたよね」とか「私、昔よくこの海に遊びにきていたんです」とか言おうと思っただけ、言えなかった。実の所この駅の周辺だけは時間が止まっていると思っただけ、そんな事はなかったのだ。古い公衆電話が店内に置かれていて、その下に古い雑誌が積まれていたので少し手に取って読んだ。それら無機物だけが當時の面影を保有し得ていた。

*

その後、駅前で煙草を吸っていた暇そうな白髪なのタクシー運転手がいたので乗せてもらって、シーが行った一本道を行った。道の両側に生えている背の高い草の雰囲気は相変わらずだが、でこぼこだった土道は綺麗に補整されていた。昔のある雨の日、この道で見つけた小さな小さな蛙のお腹は本当に柔らかかった。しばらくすると彼女がいたので徐行してもらいつつ窓を開けて「ねえ」と声をかけた。

「なに」

「…もう追いついたよ」

「だから、なに」

「…追いついたんだってば」

それまで前を見ていたシーは目線だけこちらに向けて「あんたが逃げたんじゃない」と言った。散々振り回された上にそんな事を言われてかちんと来た私は彼女を相乗りさせた。「あんたねえ！」と憤慨して言おうとした時、シーの目元に泣きべそその跡を見て、はっとした。それからタクシーの閉じた空間の中では運転手が気になってしまい、それで私は叱るのは止めた。シーも何も言わなかった。先ほどまで暑くて汗をかいていたが、タクシー内は冷房が効いていて肌寒かった。

運転手が「海岸に行きますか」としゃがれ声で言うので、「お願いします」と答えた。

*

シーズン前の夕暮れ時の海岸には人がほとんどいなかった。沖からこちらに向かつて風がびょうびょうと吹いていた。遠くからここまで、何も障害物に影響されず届いた風だった。それは暖かく、ミネラルをたくさん含んでいると思った。風、つまり大きな空気の動きは思っている以上に大きく、私達は小さかったので簡単に包み込まれてしまった。体全体を吹き付けられているので、普段感じない腕の毛などが撫でられるのを感じた。口を大きく開けると、自分が鯉のぼりみたいに風を取り入れてそっくり出せる気がした。

まばらに草が生えた砂の丘に私とシーは腰を下ろし、海の方こうを眺めた。砂に手を埋めると、中は思ったよりひんやりしていた。

「昔さ、アイスクリーム屋があったじゃない？」

「うん、行商のおばあさんがやってる、リヤカーのやつね」

「お父さん達が勝手になくなっちゃったけど、どうしても食べたくて一人で買いに行ったよね」

「海に行った水着のまま、麦藁帽子被ってお金だけ握ってね」

「焦って濡れた足でビーチサンダル履いてたから、途中で緒が切れちゃってさ」

「足が痛くなっちゃったんだよね。でも一応アイス屋まで行って」

「おばあさんの動きがゆっくりだから、待ってる間、足が痛くて道路の端に座り込んで」

「やっとアイスを貰えたと思って立ち上がったら、座ってた地面にお尻の形の濡れた跡が残ってたよ」

「何か恥ずかしくてね。すごくすごく暑い日だったからすぐ乾くだろうし、そもそも誰も気にしないんだろうけど…」

「それを理由にしてもう少しそこにそうして居たかったのかもね」

シーと私は寝っころがって茜色の空を真正面に眺めた。白い月と、それから瞬く星の影があった。しばらくすると視覚はにわか反転して空を見下ろす気分になった。空に落ちてしまわないように、小さな草を握り締めた（でもあまり力を入れ過ぎると草が千切れてしまうから加減をして）。

しばらくシーとそうやって昔の話をぼつぼつとしていたら、あの頃—いつからいつまでかは正確には分からないけれど、確かに世界は柔らかく信頼できる膜に包まれていたのだという事を思い出した。そんな事は、まったくとんと忘れていた。その中で私という新しい命は伸び伸びと育って、遊んでいた。それは今も気になっているような金銭や対他者との関わり等の現実的な要素も少なからず関係していたと思うが、それよりもっと、ああ何て言えばいいんだろう。世界という存在全体が私を知ってくれていて、私も知っていたというか…経験とか身分とかじゃなく…仲間でもあり、良い意味で孤独だったはずで…雨を少しづつ溜めるんじゃないやなくて、水が溜まったプールに飛び込むような…掛け値無し、無償の雰囲気。

この感覚、昔はよく感じていたけれど、うまく言葉で言えたためしが無い。知らず知らずの内に私が失ってしまったのか、それとも世界が剥がれてしまったのか。多分、シーは知っている。海岸はもう闇の衣をまとい始めている。

私達は立ち上がって砂を払った。冷たい夕暮れの風に煽られて、髪が舞う。

「ね」

「うん？」

「そろそろ帰ろっか」

「…うん」

私は、シーに抱かれて、ぱしゃんと弾けて消えた。

* * *

シーは私の服を胸に抱きしめて帰りの電車に揺られている。靴の中の砂がじやりじやりと心地良くて、足の指の先でにじっている。

隣で座っている女の子が、お母さんに「ねえ、シャボン玉の匂いがする」と言う。お母さんは「そんな匂いしないわよ」と言う。シーは、くしゃん、とクシャミをする。夜明けの夢の予感が、漂っていたはずだった。

*She and me
loiol*

*aka-094
akamirecords*